

「自主創造」の 日本大学をRebilde!

宮里直也教授

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■都城市の建築一家とは

宮里直也さんは、覇志堂がこれからの構造界を引っ張り、日本大学を背負って立つと見込む日本大学理工学部建築学科教授である。まだ、青年のような笑顔からの小気味よい会話に惹きつけられる。

そんな宮里さんは、建築を生業とするために生まれ育ったような人である。九州の都城市で棟梁として工務店を切り盛りしていた父親は、就学前から三人の息子を一家の労働力として使ったという。母親も一緒に頑張っていたとは凄い。宮里さんの顎の傷跡は、下小屋で働いたときに負った勲章なのです。鉄骨業へと事業を移した父が、大学生の宮里さんが帰省すると一職人として働かせるのは当たり前であった。鉄骨工場の建物も一家でつくったというから、ひとつの物語だ。宮里さんは、ダンプからタワークレーンまで免許をもち、現場仕事はなんでもこいの他に類を見ない研究者だ。建築を学んだ二人の兄が継いだ宮里鐵工建設は、今日もカッターの音を響かせているのです。「やたら詳しいと思っていた!」と初めて知る話に覇志堂も驚嘆するのだった。小学生の頃、東京ドームツアーに父が参加させてくれた。それが、上京して建築を学びたいというきっかけになったかもしれないと思うそう。

■日本大学一筋に迷いなし

「日本大学を選んだのは如何?!」その答えは、ジャイアンツファンで東京ドームが近いからだったと言う。これと決めたら一筋な性格で、大学院も日大に進み27歳まで在籍して、今も母校で教鞭にたつ。学部時代は主に空間構造の研究を行い、大学院ではケーブル構造などの施工時解析を研究した。構造界を牽引する構造家・斎藤公男先生に師事して、学ぶ時にはしっかり学び、研究室二人目のドクターとなった。研究室に留まらず、色々な施工現場に派遣され



多くを得たのは、技術力と人柄からであったと想像できる。斎藤先生の元で、苦労を苦労と思わず現場研究に勤めた。さいたまスーパーアリーナの新築工事にも朝礼から参加したと語る宮里さんだ。「なぜ教職に?」学部生でありながら「斎藤先生の仕事っておもしろそう」といったのが思い出されると…。挑戦してみないとわからないのが信条だから、師の斎藤先生の采配で日本大学の先輩である金田勝徳さん率いる構造計画プラス・ワンに席を置き4年。実務経験できたのは宝だという。早朝5時に出勤し15時まで勤務、夕方から日大で学生の指導をする日々だった。2008年に斎藤教授が退官されたときに助教となり、2017年に教授となったのです。

■学生よ、研究室をディズニーランドと思え

早朝からの仕事は宮里さんの生活スタイル、たまの休みも朝寝は論外で「1日がもったいない」と動く。学生は皆いい子たちで、中には独り立ちしていくと思える優秀な学生もいる。「しかし…」と、宮里教授は苦悩する。「答えを最初から求める学生も多いのが不満なのです」と。学生である今にしかできないことが沢山あるはずではないか、今やってほしいと思うことが沢山あるのだ。「研究室をディズニーランドと思ったらどうだろう?」。お金を払って1日中楽しむ場である。私たちの研究室は楽しいアトラクションと同じなのだ。「学生よ、一步踏み出してほしい」答えはその後に必ず付いてくるから。建築を愛し、教職に己を賭ける宮里直也は、ウォルト・ディズニーのように偉業を達成すると信じさせてくれるのです。